

第二次「四季」創刊前後の中原中也

——「四季」における中原中也、中原中也における「四季」(1)——

加藤 邦彦

一、
一九三四年一〇月、月刊「四季」が創刊された。一九四四年六月の終刊までに計八一冊刊行された、いわずとした戦前最大の詩雑誌である。一九三三年に二冊刊行されたのち休刊となっていた季刊詩文誌「四季」の後継誌で、季刊「四季」および一九四六年と一九六七年にそれぞれ創刊された「四季」と区別するため、第二次「四季」と呼ばれている。

中原中也も創刊以来、この第二次「四季」に多くの作品を発表し、一九三六年二月発行の第一五号からは同人にも加わっている。そのため、中原の後期の詩人としての活動を考える上で、この雑誌との関わりは決して軽視することができない。にもかかわらず、そのことについて、これまで十分に検討されてきたとはいえないように思う。

両者の関わりが話題となる際、必ずといっていいほど強調され

るのが、「四季」にとって中原の存在は異質だった、ということだ。室生犀星の発言を紹介しながら「『四季』のふんい気の中の異分子中原の個性」^②について語る丸山薫、「かれらの抒情は、異質であった中原中也を除いては、すべて人間社会の日常的な葛藤・矛盾・対立さえも詩概念のなかに導入することができる」^③なかつた、中原を例外としながら「四季」を批判する吉本隆明、「いかに生かすべきかという問題が捉えられている」^④点で、中原は「やはり『四季』派と違」^⑤うと指摘する鮎川信夫、「ランボーの訳者であるにもかかわらず、というより訳者であるがゆえに、『四季』の中で中原は異端者であった」^⑥という吉田熙生、「へ日本への回帰」の時流が滔々として押し寄せていた時代に、そのことには「少しも動じ」ないで「風土との異和や屈折の根」を「幼年期のイメージにまでさかのぼって仮構」するような詩を書いていた、^⑦という意味で「中也は明らかに『四季』派とは異質な詩人であった」^⑧と述べる北川透など、それぞれ立場は違うものの、い

れも「四季」における中原の異質さを強調している。また、小川和佑は「文学史的常識で『四季』の詩人と考えるよりも、この期の作品を『歷程』を通じて考えることの方が、中原の詩風をより理解しやすい」ことから「中原中也という詩人を『歷程派』の詩人という形で見ていくべきではないだろうか」(傍点原文)と主張しているが、このような考え方の根底にもやはり、中原は「四季」にとって異質な存在だった、という認識があるといえるだろう。

確かに中原は第二次「四季」にとって異質な存在だった。そのこと自体は疑いようもなく、右の小川の言葉を借りれば今日ではもはや「文学史的常識」であるようにさえ思われる。しかし、だからといって安易に「四季」から中原を遠ざけてしまうと、わたしたちは中原の後期の詩活動の一面を見落としてしまうことになりかねない。先に述べたように、中原はこの雑誌に多くの作品を発表し、一九三六年には同人にも加わっている。そのような雑誌が中原に何の影響も及ぼさなかったとは考えにくい。ところが、わたしたちはそのことについて、第二次「四季」における中原の異質さに眼を奪われるあまりに、これまでほとんど検討らしい検討をしてこなかったのである。

第二次「四季」との関わりは果たして何を中原にもたらしたのか。あるいは何ももたらさなかったからこそ「四季」にとって中原は異質だったのか。わたしたちは中原の後期の詩活動を検討す

るために、そのことについてあらためて考えてみる必要があるだろう。

そのことは同時に、第二次「四季」の内実について考えることでもある。岩本晃代は次のように述べている。

これまでの『四季』および『四季』派^①研究は、研究対象となる詩人が堀辰雄、三好達治、立原道造等の一部の詩人^②にほぼ限られており、それによって『四季』派のイメージも形成されてきたと言えるだろう。それによって(四季派)は、主に萩原朔太郎を源流とする詩人達であるとされ、丸山薫や蔵原伸二郎、伊東静雄、中原中也においては、「異質」という言葉で片付けられてきた。『四季』派を認めるか、そうでないかという立場も、この偏った研究状況が起因しているのではないだろうか。同人三十二名、寄稿者三百人を擁した『四季』の全体像の究明はこれからであり、それを通して『四季』派というものの内実も明らかになっていくはずである。主義主張を持たなかった雑誌であるからこそ、多面からその本質を検討することが重要であると考える。

「異質」という言葉で片付けられてきた^③中原のような存在を、第二次「四季」との関係のなからあらためて捉え直していくこと。そのことは、まだ全体像の捉えきれない『四季』派^④というものの内実の検討という課題にもつながっている。

二、

第二次「四季」の創刊を発案したのは、堀辰雄である。その前身である季刊「四季」をほとんどひとりで編集していた堀は、一九三四年初頭の三好達治との会話のなかで、詩の専門誌としての「四季」リニユーアル創刊を思いつく。小川和佑は、おそらく丸山薫の「雑誌創刊の発意は堀辰雄によった。堀が三好に伝え、三好が私に相談をかけた。奇しくもそれは三好当人の結婚披露の晩だったと思う」という証言を根拠に、その話が行われたのを一月二〇日、三好の結婚披露宴が行われた神田北京亭の席上としているが、三好が桑原武夫に宛てた一月一六日付の書簡に「今度、目下休刊の状態になつてゐる『四季』を復活させ、同名の詩の雑誌を出すつもりです。編輯の任には小生と堀とが協力し、室生さんをも煩し、津村信夫君に事務を執つて貰ひ、丸山君に津村君の後見でもして貰つて、——これは目下部君が控へてゐるので四月号位からきつと実現するだらうと思つてゐます」と記されており、実際にはもう少し前に話があったと思われる。計画は「ずんずん具体的に話が進んでゆき」、五月初旬には「大体のプラン」も決まった。

各執筆者への原稿依頼が六月初旬ごろ行われたことは、萩原朔太郎の六月一三日付堀宛書簡に「先日、津村君が見え、四季原稿の件で話があつた。アホリズムでよかつたら、書きます。〆切如

何？」とあることからわかる。津村信夫の六月六日の日記に「午後三時、レインボグレルに於て四季同人会あり。堀、丸山氏に逢ふ。文芸春秋の諸氏見ゆ。小林秀雄、深田久弥、永井龍男、今日出海氏に詔(紹)介さる」と書かれていることから、このとき誰に原稿を依頼するかが決定したのではないだろうか。その原稿依頼を受けたひとりに中原がいた。

中原が第二次「四季」より原稿を依頼されたのは、季刊「四季」の執筆者のひとりであったからだと考えられる。ただし、直接的には右の「四季同人会」が行われた場所に「文芸春秋の諸氏」が居合わせたことが関係しているのかもしれない。「文芸春秋」はおそらく「文学界」の誤り。偶然だろうが、このとき堀辰雄と小林秀雄が顔を合わせている。小林は、季刊「四季」の寄稿者だったとともに、同誌への中原の執筆を堀に推薦した人物でもあった。もしかすると、このときの邂逅が堀に中原への原稿依頼を思いつかせたか、あるいは中原への原稿依頼を堀に促すような小林の発言がこのときあった可能性もある。

「四季」から原稿依頼を受けた中原は、編集事務担当の津村信夫にただちに詩篇を送付した。そのことに関連するのが、次に引用する中原の六月九日付津村宛書簡である。

拝復只今同便にて詩稿お送りしました。此の前お送りしましたものは昨年十月号の「紀元」に発表しましたものを、うっかりしてお送りしたのでした。もしなんでしたら今度お送

りました方だけを御掲載下さいまし それとも両方お出し
下さるとも小生は結構です

「同便にて」は中原の独特の用語で、「別便にて」の意。この書簡と同時に投函する封書で、という意味である。この書簡によれば、中原は六月九日以前に津村に「詩稿」を送付したが、そのとき「昨年十月号の「紀元」に発表しましたもの」を「うっかり」間違えて送付してしまったらしい。そこで、以前送付した原稿を別の原稿に差し替えてほしいという申し出を行っているのが、右の書簡である。

一見すると何でもない内容の書簡に見えるが、冷静に考えるとこの原稿差し替えにはよくわからない点がいくつもある。まずわからないのは、中原が最初に第二次「四季」創刊号に送ったのはどの詩篇か、ということだ。「紀元」一九三三年一〇月号には「詩三篇」として「春の思ひ出」「夏の日の歌」「秋の一日」が掲載されているが、中原のいう「昨年十月号の「紀元」に発表しましたもの」がいずれを指すかは不明。このうち、「秋の一日」は一九三四年二月発行の「四季」第三号に掲載されている。いったん発表を取りやめた詩篇を再度寄稿するとは考えにくく、「春の思ひ出」か「夏の日の歌」が創刊号のために最初に送付されたと思われるが、「四季」編集サイドが「両方お出し下さるとも小生は結構です」という中原の意を酌み取って最初に送付された「秋の一日」を第三号に掲載したとも考えられ、はっきりしたこ

とはよくわからない。

一方、差し替えた「詩稿」のほうは、第二次「四季」創刊号をみれば明らかである。一九三四年一〇月発行の同誌には、中原の第一詩集『山羊の歌』所収の「みちこ」が掲載されている。しかし、この詩が差し替え原稿として選ばれた理由については、やはりよくわからない。「みちこ」は次のような作品だ。

そなたの胸は海のやう／おほらかにこそうちあぐる。／はるかなる空、あをき浪、／涼しかぜさへ吹きそひて／松の梢をわたりつつ／磯白々とつぎけり。／／またなが目にはかの空の／いやはてまでもうつしるて／竝びくるなみ、渚なみ、／いとすみやかにうつろひぬ。／みるとしもなく、ま帆片帆／沖ゆく舟にみとれたる。／／はたその類のうつくしさ／ふと物音におどろきて／午睡の夢をさませし／牡牛のごとも、あどけなく／かるやかにまたしとやかに／もたげられ、さてうち俯しぬ。／／しどけなき、なれが頸は虹にして／ちからなき、嬰兒ごとく腕して／絞うたあはせはやくふし、なれの踊れば、／海原はなみだぐましき金にして夕陽をたたへ／沖つ瀬は、いよとほく、かしこしづかにうるほへる／空になん、汝の息絶ゆるとわれは眺めぬ。

中原の詩にはめずらしい女性の肉体を讚美した作品だが、それほど出来がいいとは思われない。そのことが、ただでさえよくわからないこの詩篇が差し替え原稿として選ばれた理由をますます

わかりにくくしている。

第一連冒頭は「海のやう」に波打つ「そなたの胸」が歌われていて面白いが、「はるかなる空、あをき浪」以下の表現は、七五調や文語の使用と相俟って「殆んど、新体詩のことばの表出の水位と変りない」ように感じられる。もちろん、新体詩と変わらないうからよくないのではない。その表現が、ありふれたイメージしか生み出していないことが問題なのである。第二連の「なが目」が「沖ゆく舟にみとれ」ている様子も、映画のワンシーンのようではあるがイメージとしては平凡であり、第三連に描かれている「物音」に「午睡の夢」を破られた「そなた」が「牡牛のごとく」「類」を「もたげ」、ふたたび「うち俯し」ていく姿も、起床時のけだるさを巧みに表現しているものの、それほど際立った表現とは思われない。

この詩で評価できるところがあるとすれば、それは最終連だろう。「海原」に「夕陽をたたへ」させ、「沖つ瀬」を「かしこしづかにうるほ」わせる「なれ」の踊りは、美しいどころか神々しくさえある。ところが、神々しさを携えていたその「なれ」は、作品のラストで唐突に「息絶」えてしまい、その死が「空」に拡散していくと同時に、作品の余韻もどこかに拡散していき、詩のイメージがふくらんでいかない印象がある。末尾における「なれ」を「眺め」る「われ」という構図も、やはり唐突だ。

しかしながら、あまり高くは評価できないこの詩篇を、中原は

『山羊の歌』全五章のうち、第三章の標題作として選んでいる。

中原はこの詩に自信を持っており、「四季」創刊号の差し替え原稿にこの詩が選ばれたのもそのためだろうか。概して、作品を書いた側の意識とそれを読む側の評価は必ずしも一致しないが、この詩についてもそのようなケースのひとつなのかもしれない。

ところで、第二次「四季」創刊号の差し替え原稿として中原が「みちこ」を選んだことには、右とは異なる、もうひとつの疑問がある。実は、「みちこ」の初出は一九三〇年一月発行の「白痴群」第五号で、「四季」創刊号に掲載されたものは再掲にあたる。つまり、以前発表したことのある詩をうっかり送ってしまったという理由で中原は津村に「みちこ」への原稿差し替えを申し出たにもかかわらず、差し替えたほうの詩もまた以前に発表したことのある作品だったのである。では、どうして中原は既発表の作品の差し替え原稿として、やはり以前に雑誌発表したことのある作品をわざわざ選んだのだろうか。

あわせて疑問に思うのは、なぜ中原が今回に限って原稿の差し替えを申し出たのか、ということだ。中原はこれまでに、一度雑誌発表した詩篇を別の雑誌に再発表する、という行為を何度となく繰り返してきた。その数は非常に多く、『山羊の歌』全四四篇中、約半数にあたる二一篇が二度以上雑誌発表されている。しかもそれらのうち、「サーカス」「秋の一日」「妻じき黄昏」の三篇にいたっては、再発表のみならず再々発表まで行われているので

ある¹⁸⁾ところが、中原はこのたびの第二次「四季」創刊号への寄稿に限りて再発表を避けるようなそぶりをみせている。これは一体どういふことなのだろう。

まず前者について考えてみると、発表詩篇が「昨年十月号の「紀元」に発表しましたもの」から「みちこ」に差し替えられたことは、同じ再発表にあたる詩篇でも再発表してよいものとよくないものが中原のなかでは区別されていたことを示している。すると次に、両者の違いはどこにあるか、ということが検討されなくてはならないが、その際、「みちこ」の初出が一九三〇年一月発行の「白痴群」第五号であったことを思い出す必要があるだろう。中原が雑誌や新聞に発表した詩篇を一覧にしたのが、【資料A】の「中原中也・紙誌発表詩篇リスト」である。これにもとづき中原の詩の雑誌発表を概観してみると、そこからはひとつの事実が浮かび上がってくる。それは、時期がほかと大きく異なっている「米子」を除いて、再発表された詩篇の初出はいずれも一九二八年から一九三〇年までの間であり、発表媒体も「スルヤ」「生活者」「白痴群」の三誌に限られている、ということだ。とすれば、中原が差し替え原稿として「みちこ」を選んだのは、そこにこそ理由があったに違いない。

中原は「スルヤ」「生活者」「白痴群」の三誌、とりわけみずからが編集していた「白痴群」に多くの詩篇を発表した。しかし、それらの雑誌発表が世間の人たちから注目されることはほとんど

なく、中原は依然として無名詩人のままであった¹⁹⁾。すなわち中原には、あるいは世間の人々にとっても、それらの雑誌発表は行われていないに等しかったのである。そこで中原は、「同人誌の閉鎖的な場からより社会的な場での正当な評価²⁰⁾」を得るために、それらの雑誌に発表した詩篇の再発表を思いついた。一見すると、中原が詩篇の再発表を繰り返したのは、以前その作品を雑誌発表したことがあるかどうかということに中原がほとんど無頓着だったからのようにみえるが、事實はむしろ逆であったと思われる。

中原は、「スルヤ」「生活者」「白痴群」にかつて発表したことのある詩を選んで再発表を行っていたのではないか。まただからこそ、第二次「四季」創刊号への差し替え原稿として、まだ再発表が一度も行われていない詩篇のなかから「みちこ」が選ばれたのではないだろうか。中原が「昨年十月号の「紀元」に発表しましたもの」の代わりに「みちこ」を選んだ理由は、以上のように考えられる。

それではもうひとつの疑問、中原が第二次「四季」創刊号への寄稿に限りて原稿の差し替えを申し出ている点については、どうだろうか。右の推測を踏まえて「スルヤ」「生活者」「白痴群」への雑誌発表を除外して考えると、再発表された詩の数はわずか三篇と極端に少なくなる。おそらく中原は、「スルヤ」「生活者」「白痴群」への発表作品のなかから再発表する詩篇を選んでいたのとは逆に、一度再発表した作品をあらためて再発表することの

【資料A】 中原中也・紙誌発表詩篇リスト

▼中原が詩篇を発表した雑誌・新聞・アンソロジーを、詩集ごとにより一九二八～三〇年、一九三三～三四年、一九三五～三七年に区分して示した。▼数字は発行年月を示す。したがって、その雑誌に示された年月号とずれる場合がある(例「四季」)。▼中原自身が発表したのではないと思われるものはリストから除外した(例『一九三五年詩集』所収の「詩人は辛い」)。

■『山羊の歌』(一九三四年二月刊、ただし本文印刷は一九三二年)

詩篇名	一九二八～三〇	一九三三～三四	一九三五～三七
春の日の夕暮	「生活者」二九・九	「半仙戯」三三・六	「日本歌人」三四・九
月	「生活者」二九・九	「短歌と方法」三四・二	
サーカス	「生活者」二九・一〇	「紀元」三四・三	
春の夜	「生活者」二九・一〇	「紀元」三四・四	
朝の歌	「スルヤ」二八・五		
臨終	「スルヤ」二八・五	「文芸」三四・六	『現代日本詩人選集』 三六・一
都会の夏の夜	「生活者」二九・九		
秋の一日	「白痴群」二九・七	「紀元」三三・一〇 「四季」三四・二二	
黄昏	「生活者」二九・九		「日本歌人」三五・一
深夜の思ひ	「白痴群」二九・七		
冬の雨の夜	「白痴群」三〇・一		『現代日本詩人選集』 三六・一
帰郷	「スルヤ」三〇・五	「四季」三三・七	
凄じき黄昏	「白痴群」二九・七	「紀元」三三・九 「青い花」三四・二二	

逝く夏の歌	「生活者」二九・九	「四季」三三・七	『現代日本詩人選集』 三六・一
悲しき朝	「生活者」二九・九	「鷗」三四・七	
夏の日の歌	「白痴群」二九・七	「紀元」三三・一〇	
夕照	「生活者」二九・一〇	「青い花」三四・二二	
港市の秋	「白痴群」二九・七		
ためいき	「生活者」二九・一〇	「紀元」三三・一〇	
春の思ひ出	「生活者」二九・一〇	「世紀」三四・八	『現代日本詩人選集』 三六・一
秋の夜空			
宿酔			
少年時	「白痴群」三〇・四	「四季」三三・七	
盲目の秋	「白痴群」三〇・四		
わが喫煙	「白痴群」三〇・四	「コギト」三四・二二	
妹よ	「白痴群」二九・四		
寒い夜の自我像	「白痴群」二九・九		
木陰	「白痴群」三〇・四		
失せし希望	「スルヤ」三〇・五		
夏	「白痴群」二九・九		
心象	「白痴群」二九・二		
みちこ	「白痴群」三〇・一	「四季」三四・一〇	
汚れつちまつた	「白痴群」三〇・四	「紀元」三四・一	
悲しみに……			
無題	「白痴群」二九・四		
更くる夜	「白痴群」三〇・四		
つみびとの歌	「白痴群」三〇・四	「紀元」三四・七	
秋	「白痴群」二九・一	「紀元」三三・九	
修羅街歌	「白痴群」三〇・一	「日本歌人」三四・二二	

雪の宵	「白痴群」三〇・四		
生ひ立ちの歌	「白痴群」三〇・四		
時こそ今は……	「白痴群」三〇・四		
羊の歌		「鶴」三四・四	
憔悴		『一九三四年詩集』三 四・一〇	
いのちの声			

■『在りし日の歌』(一九三八年四月刊)

詩篇名	一九二八〜三〇	一九三三〜三四	一九三五〜三七
含羞			「文学界」三六・一
むなしさ			「四季」三五・二
夜更の雨			「四季」三六・八
早春の風			「帝国大学新聞」三五・五
月		「紀元」三四・一	
青い瞳			「四季」三五・一一
三歳の記憶			「文芸汎論」三六・六
六月の雨			「文学界」三六・六
雨の日			「作品」三六・六
春			「文学雑誌」三六・五
春の日の歌			「文学界」三六・五
夏の夜	「生活者」二九・九		
幼獣の歌		「世紀」三四・八	
この小児			「四季」三六・八
冬の日の記憶			「文学界」三六・二
秋の日			「文学界」三六・二
冷たい夜			「四季」三六・二
冬の明け方			「歴程」三六・四

老いたる者をして	「スルヤ」三〇・五		
湖上	「桐の花」三〇・八		
冬の夜			
秋の消息		「半仙戯」三四・七	
骨		「紀元」三四・六	
秋日狂乱			「旗」三五・一一
朝鮮女			「文学界」三五・五
夏の夜に賞めて			『現代日本詩人選集』 三八・一
みた夢			「四季」三五・九
春と赤ン坊			「文学界」三五・四
雲雀			「文学界」三五・四
初夏の夜			「文学界」三五・八
北の海			「歴程」三五・五
頑是ない歌			「文芸汎論」三六・二
閑寂			「歴程」三六・三
お道化うた			「歴程」三六・三
思ひ出			「文学界」三六・八
残暑			「婦人公論」三六・九
除夜の鐘			「四季」三五・一一
雪の賦			「四季」三六・四
わが半生			「四季」三六・六
独身者			「四季」三六・五
春宵感懐			「文学界」三六・七
曇天			「改造」三六・七
蜻蛉に寄す			「むらさき」三六・二〇
ゆきてかへらぬ			「四季」三六・一〇
一つのメルヘン			「文芸汎論」三六・一一
幻影			「文学界」三六・一一

第一次「四季」創刊前後の中原中也——「四季」における中原中也、中原中也における「四季」(1)——

あばずれ女の亭			〔歷程〕三六・一一
主が歌つた			〔文学界〕三六・一二
言葉なき歌			〔新女苑〕三七・二
月夜の浜辺			〔文学界〕三七・二
また来ん春……			〔文学界〕三七・二
月の光 その一			〔文学界〕三七・二
月の光 その二			〔文学界〕三七・二
村の時計			〔四季〕三七・二
或る男の肖像			〔四季〕三七・二
冬の長門峡			〔文学界〕三七・四
米子			〔ペン〕三六・一二
正午			〔文芸懇話会〕三七・四
春日狂想			〔文学界〕三七・五
蛙声			〔四季〕三七・六

■ 生前発表詩篇

詩篇名	一九二八～三〇	一九三三～三四	一九三五～三七
暗い天候	〔白痴群〕三〇・一		
嘘つきに	〔白痴群〕三〇・一		
我が祈り	〔白痴群〕三〇・一		
夜更け	〔白痴群〕三〇・四		
或る女の子	〔白痴群〕三〇・四		
夏と私	〔桐の花〕三〇・一〇		
じ子への哲学		〔紀元〕三四・二	
我が子レンヤ			〔四季〕三五・三
寒い!			〔歷程〕三五・五
雨の降るのに			〔早稲田大学新聞〕三五・五
落日			〔早稲田大学新聞〕三五・五

倦怠			〔四季〕三五・六
女給達			〔日本歌人〕三五・九
夏の明方年長妓 が歌つた			〔文学界〕三五・九
詩人は辛い			〔四季〕三五・一〇
童女			〔歷程〕三六・三
深更			〔歷程〕三六・三
白紙			〔歷程〕三六・三
倦怠			〔詩人時代〕三六・四
夢			〔鷗〕三六・七
秋を呼ぶ雨			〔文芸懇話会〕三六・九
はるかぜ			〔歷程〕三六・一〇
凛々と口笛吹いて			〔少女画報〕三六・一一
現代と詩人			〔作品〕三六・一二
郵便局			〔四季〕三七・一
幻想			〔四季〕三七・一
かなしみ			〔四季〕三七・一
北沢風景			〔四季〕三七・一
或る夜の幻想			〔四季〕三七・二
聞こえぬ悲鳴			〔改造〕三七・四
道修山夜曲			〔黎明〕三七・四
ひからびた心			〔文芸懇話会〕三七・四
雨の朝			〔四季〕三七・五
子守唄よ			〔新女苑〕三七・七
溪流			〔都新聞〕三七・七
梅雨と弟			〔少女の友〕三七・八
道化の臨終			〔日本歌人〕三七・九
夏			〔詩報〕三七・九
初夏の夜に			〔四季〕三七・九
夏日静閑			〔文芸汎論〕三七・一〇

ないよう一応は配慮していたのだろう。第二次「四季」創刊号への寄稿に際して原稿差し替えの申し出が行われたのも、そのためだったと思われる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、中原は必ずしもそのルールを厳密に守っていたわけではない、ということだ。そのことは、一度再発表したことがあるにもかかわらず、あらためて再発表が行われた三篇の例外に何よりも示されているし、同様のことは先に引用した津村宛書簡の「もしなんでしたら今度お送りしました方だけを御掲載下さいまし それとも両方お出し下さるとも小生は結構です」という記述からもうかがわれる。中原は、第二次「四季」創刊号への寄稿に際して原稿の差し替えこそ行ったものの、以前再発表した作品のさらなる再発表を嫌がっておらず、むしろそれを積極的にに行おうとさえしているのである。そうした中原の態度が、繰り返し行われる詩篇の再発表・再々発表というほかの文学者にはあまり例をみない中原独自の発表スタイルを生み出したのだろうし、そもそも中原が一度再発表した詩篇のさらなる再発表を嫌うような人物だったら、「スルヤ」「生活者」「白痴群」に発表した詩篇の再発表すら最初から行われていなかったに違いない。第二次「四季」と関わる以前、あるいは関わり始めたころの中原には、こうした型破りなところ、悪くいえば認識の甘さのようなものがあった。

興味深いことに、そうした中原の態度を批判するような文

章が、第二次「四季」創刊号に掲載されている。第二次「四季」の共同編集人として堀、三好と名前を連ねている丸山薫の文章で、巻末に掲載されている「声明二項」の前半、「I「セルパン」十月号の詩について」だ。

第一書房発兌雑誌「セルパン」十月号所載の小説の詩「鶴」二篇はそれぞれ本年二月の「文芸春秋」と「レツエンゾ」に発表済みとなつてゐたのを、該書房の三浦逸雄氏の好意ある思ひちがひによつて、同氏の保管せる小生詩集の草稿中から独断で抜萃掲載されたものである。その結果として、思ひもうけぬ二重発表となつてしまつたことは小生の深く遺憾とするところであるが、もともとこの再度の発表は小生の全く関知しない間に為されたものであるかぎり、小生に於いては何等その咎を負ふべき責任のないことを声明しておきます。

中原が詩篇の「二重発表」を避けるために、最初に送つた原稿からやはり「二重発表」にあたる詩稿への差し替えを行った号で、「四季」共同編集人のひとりである丸山薫が「思ひもうけぬ」ことながらもみずから起こしてしまつた「二重発表」の弁明を述べているのは、おそらく単なる偶然だろうと思われる。ただし、右の丸山の文章を中原が眼にしていることは、この文章が掲載された第二次「四季」創刊号に中原の詩も掲載されていることからほぼ間違いない。「二重発表」が行われた雑誌の社会的地位も、詩人としての立場もまったく異なる丸山と中原を単純に比較

することはできないが、第二次「四季」と関わりを持つ以前に何度となく「二重発表」を行っていた中原は、この丸山の文章を読み、果たして何を思っただろうか。

このまま「二重発表」を続けていたら、中原はいつか「咎を負ふべき」存在として、周囲の詩人たちから糾弾されていた可能性もなかったわけではない。しかし、中原にとって幸運だったのは、一九三四年一月に文圃堂書店からの詩集出版が決まり、その翌月、第一詩集『山羊の歌』が刊行されたことである。思えば、中原が「同人誌の閉鎖的な場からより社会的な場での評価」を願って詩篇の再発表を行っていたのは、『山羊の歌』刊行の社会的支援を受けんがため⁽²⁾であった。つまり、『山羊の歌』の出版が決まった時点で、中原は詩篇の再発表を行う必要がなくなったのである。

実際、第二次「四季」が創刊された一九三四年一〇月以降の中原の雑誌発表をみると、詩篇の再発表は「日本歌人」一九三四年一月号掲載の「修羅街晩歌」、「青い花」一九三四年二月号掲載の「凄じき黄昏」⁽³⁾、「港市の秋」、「コギト」一九三四年二月号掲載の「わが喫煙」、「四季」一九三五年一月号掲載の「秋の一日」と続いていくが、このうち「修羅街晩歌」「わが喫煙」は『山羊の歌』の出版が決まる以前に雑誌に寄稿されていた可能性がある⁽⁴⁾。また、「青い花」に発表された二篇が『山羊の歌』の宣伝のために、再発表にあたるかどうかを特に気にせず詩集のなか

から選ばれたものであることは、雑誌掲載時に「近刊詩集「山羊の歌」より」という標題が付されていることから明らかだ。時期の離れた「米子」を除くと、中原は「日本歌人」一九三五年一月号掲載の「黄昏」を最後に詩篇の再発表を行っていない。これらは、『山羊の歌』の出版によって、中原の再発表の目的が達せられたことを何よりもはっきりと示しているだろう。

原稿の差し替えをめぐる騒動と、第一詩集『山羊の歌』の刊行。そのようななかで、中原と第二次「四季」との関わりは始まっていった。(つづく)

注

- (1) 季刊「四季」と中原の関わりについては、拙稿「中原中也・一九三三年——季刊「四季」への寄稿を中心に——」、「昭和文学研究」第四五号、昭和文学会、二〇〇二年九月を参照。
- (2) 丸山薫「三好達治と中原中也」、「日本の近代詩」読売新聞社、一九六七年二月、二二二頁。
- (3) 吉本隆明「四季」派の本質——三好達治を中心に——、「文学」第二六巻第四号、岩波書店、一九五八年四月、一〇五頁。
- (4) 大岡昇平・鮎川信夫・中村稔・大岡信「共同討議 恩寵の詩人 中原中也」、「ユリイカ」第二巻第一〇号、青土社、一九七〇年九月、一三二頁。
- (5) 吉田照生『評伝中原中也』東京書籍、一九七八年五月、二二

六頁。

- (6) 北川透「硬い空白への接近——昭和十年代詩賞書」『中原中也わが展開——天使と子供』国文社、一九七七年五月、二四二頁。

- (7) 小川和佑『四季』とその詩人『有精堂出版、一九六九年一月、三〇—三二頁。

- (8) 岩本晃代『四季』創刊まで『昭和詩の抒情——丸山薫・〈四季派〉を中心に——』双文社出版、二〇〇三年一〇月、一〇九—一一〇頁。

- (9) 丸山薫「私と詩友」『丸山薫全集』第四卷、角川書店、一九七七年一月、三〇二頁。初出「中日新聞」一九六七年一月二三日—二月二日。

- (10) 小川和佑、前掲書(7)、一一頁参照。

- (11) 『三好達治全集』第二卷、筑摩書房、一九六六年一月、四六七頁。

- (12) 堀辰雄「四季」再刊について、「限定出版四季社・江川書房季報」第九号、四季社、一九三四年七月、六六頁。

- (13) 一九三四年五月五日付津村信夫宛堀辰雄書簡。『堀辰雄全集』第八卷、筑摩書房、一九七八年八月、九二頁。

- (14) 『萩原朔太郎全集』第三卷、筑摩書房、一九七七年二月、三五六頁。

- (15) 『津村信夫全集』第三卷、角川書店、一九七四年一月、二二六頁。

- (16) 拙稿(1)参照。

- (17) 北川透『中原中也の世界』紀伊國屋書店、一九九四年一月、

一五九—一六〇頁。

- (18) 拙稿「書く」行為の背後にあるもの——宮沢賢治と中原中也——、「日本近代文学」第六八集、日本近代文学会、二〇〇三年五月参照。

- (19) 拙稿「中原中也、その文学的出発——「朝の歌」から「白痴群」創刊前後まで——」、「日本文学研究」第三九号、梅光学院大学日本文学会、二〇〇四年一月参照。

- (20) 堀内達夫「『山羊の歌』をめぐって」、前掲書(4)、一一四頁。

- (21) 丸山薫「声明二項」、「四季」創刊号、四季社、一九三四年一月、五九—六〇頁。

- (22) 中原と丸山の関係を論じたものに、権田浩美「中原中也と丸山薫、そして坂口安吾——荒唐無稽な〈オトギバナシ〉あるいは〈メルヘン〉の系譜——」(愛知大学国文学「第四六号、愛知大学国文学会、二〇〇六年一月)がある。

- (23) 堀内達夫、前掲文(20)、一一四頁。

- (24) 『新編中原中也全集』第一卷「解題篇」角川書店、二〇〇〇年三月、一〇七—一〇八、一五六—一五八頁参照。

- (25) 「青い花」第一号、青い花編輯所、一九三四年二月、三二頁。

※中原中也の文章は、角川書店版『新編中原中也全集』を本文とし、必要に応じて各掲載誌を参照した。引用に際し、原則として旧字体は新字体にあらため、一部を除いてルビは省略した。